

創造論批判の科学的検証

—— R・ドーキンスの事例を中心として ——

十津守宏

ネオ・ダーウィニストの論客として知られるリチャード・ドーキンスは自然界におけるデザイナーという存在を完全に否定し、突然変異と自然選択によりこの世界における全ての生物の由来が説明出来ると主張している。しかし、複雑な器官の絶妙な組み合わせにより機能しており自律的に自己複製を行う生命という存在は、今日の進化論の立場に立脚する科学者達の表現においてですら、かのウィリアム・ペイリーをして理神論の提唱へと彼をなさしめた伝説的な故事に由来して、砂浜に落ちていた時計に喩えられている。この喩えそのものは、生命そのものの存在の由来が統計学的にいかにより得ないかを如実に示すそれなのであり、ドーキンス自身ですらもその統計学的なあり得なさを認めている。

しかしながら、自然淘汰という概念そのものがいまや中立進化のいう新しいパラダイムによって否定されつつあり、加えて多くの生命科学者らによる不断の努力を以ってしてもアミノ酸からタンパク質を経てDNAの組成に到るメカニズムが、RNAワールド仮説の提唱などを経ながらも、未だに明らかにされていないという今日の現状を鑑みると、突然変異と自然淘汰により全ての自然界の生命の由来を完全に説明出来るというドーキンスの主張は真に科学的な結論であるとは言い難いのではない

のだろうか。そもそも、一神教的な人格神だけではなく理神論からも完全な訣別を宣言するドーキンスの論拠は、デザイナーの存在の示唆そのものがそのデザイナー自身の由来の説明を要求されるというより複雑かつ解明し難い問題を惹起してしまふ故に、より非科学的であるという論理に基づくそれなのであり、科学的に生命の発生のメカニズムを解き明かしたことに拠るものではないのである。

現在の最先端理論物理学の領域においても宇宙開闢にあつての「最初の第一撃」という概念を捨て去ることが出来ない。また一方では宇宙を支配する物理学的法則を説明するために、あらゆる物理学的法則の支配を受けない「特異点」という概念が導入されている。これらのことから明らかなように、科学的であることに固執すれば固執する程に確実にブラックボックスとされている領域の存在を認めざるを得ない現状が現実存在しているのである。従って、ドーキンスのように実験・観察され得るもの以外は実証できないという学問的姿勢に基づき検証し得ない「世界の背後の存在」を無条件に否定するのではなく、世界の始まりや生命の起源の問題は不可知論的に解決せずに留めて置くことこそが、真に科学的といえる姿勢なのではないのだろうか。